Vol. 1, No. 2 **Fungi** Nov. 1931

Published by

The Nippon Fungological Society

(Kitaandō-mati 274, Siduoka)

菌　類

第一卷　第二號

日本菌類學會

昭和六年十一月五日發行

菌類第一巻第二號

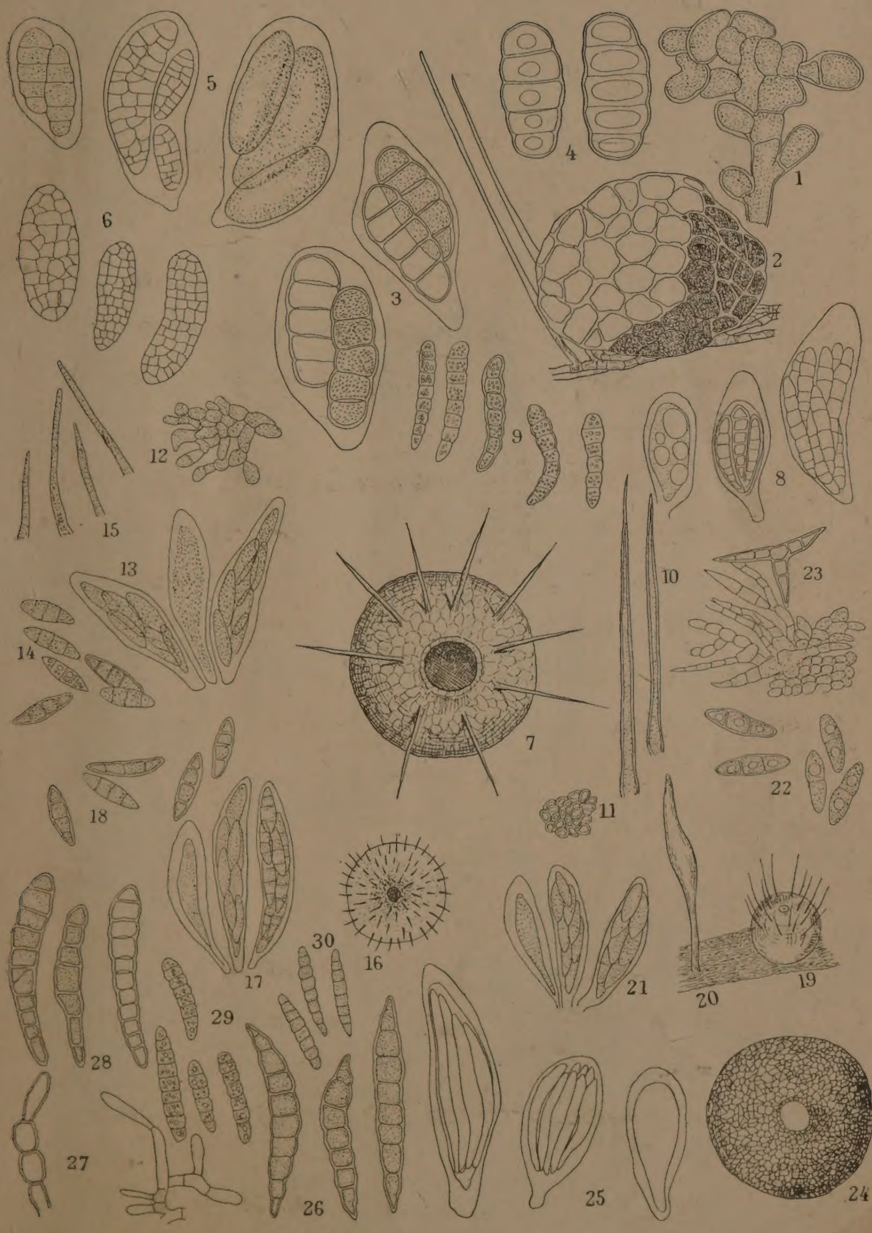
目次

會告

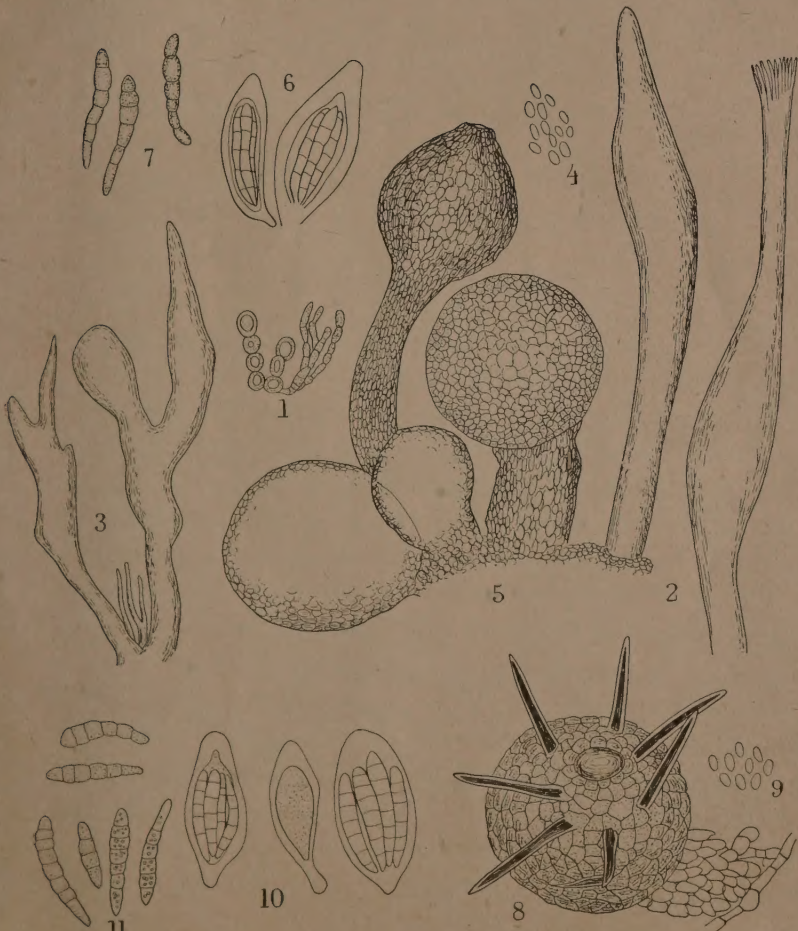
一金五拾圓也　和歌山縣 無名氏
一金貳拾五圓也　神戸市 無名氏
一金貳拾五圓也　東京府 無名氏

右本誌印刷費中に御寄附なし下され候につき正に受領仕り候玆に御芳志の程深く御禮申上候

昭和六年十一月　日本菌類學會


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

HARA, Del.



HARA, Del.

第1卷 第2號　**菌　　類**　昭和6年11月

日 本 菌 類 學 會

Vol. 1, No. 2　**FUNGI**　Nov. 1931

Nippon Fungological Society.

和名の統一に就て

菌類否動植物の名稱は學術的の立場から謂はば、學名さへあれば和名などは必要なきことは固より論ずるまでもない。然し學名は學術的のものであるのさ學名其のものを吾人が記憶するこさは極めて困難なるものである。和名は實用的或は通俗的であるを以て吾人に便益多きを以て之を捨つるこさは勿論出來ない、然らば此和名も學名の如く一定の規格の下に統一する必要があるのである、和名は古來の方言が其儘となつたものと近來發見されて新に附名されたものさ二種あるが、何等の規約も標準もなく各人個々に附名されて居るが爲め同名異種のものが多數出來て來た、今二三の例示するさカウタケは Phaeodon aspratus (Berk.) P. Henn. の學名があり食用菌であるが Amanita muscaria (L.) Fr. の如き有毒菌や Hydnum imbricatum L. をも呼ぶことがある。アワビタケの和名を有するものに Pleurotus astreatus (Jacq.) Sacc., Polyporus caeruliporus Peck. ? ; Polystictus venulosus Jungh. がある、ウスタケの名のあるものにCantharellus floccosus Schw. さ Craterullus cormucopioides (L.) Pers. があるのは甚だ不便である。學名は分類學の進歩によつて變更の必要を生ずるも和名に至つては一度附名したものは永久變更の必要なきものであるから和名の選定も注意を要するのである、然し和名は唯物の符牒であるから如何なる和名を附するも妨げはない、尤も學名と謂ふても Phallus の如き面白くない名稱もあるが和名に於ては斯かるものは無いのは命名の神聖を保つて居ると云へよう。而して吾人は最も古く定められたる名稱を遵守するこさ、重複なるものを避くるこさ、學者相會して一定の標準規格を作つて之れによつて附命せられんことを希望すると同時に、人生に餘り關係なきものには和名を附せざるがよいさ信ずるのである。(原)

日本に於ける銹菌學に關する文献目録 續

平　塚　直　秀

BIBLIOGRAPHY OF UREDINALES IN JAPAN

By

Naohide HIRATSUKA

1912（明治45. 大正元）續

163. Saccardo, P. A. — Sylloge Fungorum, **21**.
164. 澤田兼吉 — 想思樹銹病。(臺灣農事報、no. 72, p. 1—3)。
165. 澤田兼吉 — 栗の病害。(臺灣農事報、no. 64, p. 16)。
166. Sydow, P. & H. — Novae fungorum species, **7**. (Ann. Myc. **10**, p. 77—85).
167. Sydow, P. & H. — Novae fungorum species, **8**. (Ann. Myc. **10**, p. 405—410).
168. Sydow, P. & H. — Monographia Uredinearum, **3**, Heft 1.

1913（大正2）

169. 原　攝祐—Gymnosporangium に就て。[植雜、**27**. p. (348)—(349)]。
170. Itô, S. — Kleine Notizen ueber parasitische Pilze Japans. (Bot. Mag. Tokyo, **27**, p. 217—223).
171. 宮部金吾—小麥の銹病に就て。(札幌農林、**14**. p. 1—19).
172. 南部信方—マツバウドの銹病菌に就て。(日本園藝雜、**25**. no. 4).
173. 西田藤次—梨の赤星病。(果樹病蟲害篇、p. 16—20).
174. 西田藤次—梨の赤星病の豫防。(果樹病蟲害篇、p. 20—29).
175. Sawada, K. — *Uromyces hyalosporus* sp. nov. causing the disease

to the shoots of *Acasia confusa* Merrill. (Bot. Mag. Tokyo, **27**. p. 16 – 20).

176. Sydow, P, & H. – Novae fungorum species, **9**. (Ann. Myc. **11**, p. 54 – 65).

177. Sydow, P. & H. – Ein Beitrag zur Kenntnis der parasitischen Pilzflora des nördlichen Japans. (Ann. Myc. **11**, p. 93–118).

178. Sydow, P. & H. – Novae fungorum species, **11**. (Ann. Myc. **11**, p. 402–408).

179. 吉永虎馬—Hemileia 屬の發見。〔植雜、**27**. p. (67)–(68)〕。

1914 (大正3)

180. Dietel, P. – Ueber einige neue und bemerkenswerte Uredineen. (Ann. Myc. **12**, p. 83—88).

181. 藤黑與三郎–臺灣培養植物の寄生菌目錄。〔植雜、**28**. p. (391)–(396), (423)–(426)〕。

182. 藤黑與三郎–臺灣產銹菌目錄。(臺灣博、no. 19)。

183. 平塚直治–亞麻銹病に就いて。(帝國製麻株式會社々報、no. 9)。

184. 今井四郎—花卉の病害に就て、**1**。(病蟲害、**1**. p. 75–78)。

185. Long, W. H. — An undescribed species of Gymnosporangium from Japan. (Jour. Agric. Res. **1**, p. 353—356).

186. 南部信方–菊の病害と其豫防法。(病蟲害、**1**. p. 73–74)。

187. 南部信方–花卉及盆栽類の病害調査、**2**。(病蟲害、**1**. p. 345—347)。

188. 白井光太郎–植物妖異考、下卷。

189. Sydow, P. & H. — Beitrag zur Kenntnis der parasitischen Pilze der Insel Formosa. (Ann. Myc. **12**, p. 105—112).

190. Sydow, P. & H. – Zweiter Beitrag zur Kenntnis der parasitischen Pilzflora des nördlichen Japans. (Ann. Myc. **12**, p. 158–165).

191. Sydow, P. & H. – Novae fungorum species, **12**. (Ann. Myc. **12**, p. 195—201).

192. Sydow, P. & H. — Monographia Uredinearum, 3, Heft 2.

193. 豐田太吉－松の銹病と其豫防。(病蟲害、1. p. 80－83)。

194. 豐田太吉－輸出入植物の病害。(病蟲害、1. p. 159－161)。

1915 (大正4)

195. 藤黑與三郎－臺灣に於ける觀賞植物の主なる病害、2。(病蟲害、2. p. 406－409)。

196. 原　攝祐－葱の銹病に就て。(農業世界、10. no. 2, p. 51)。

197. 原　攝祐－葱の赤銹病。(農業國、9. no. 2, p. 36)。

198. 原　攝祐－梨の赤星病に就きて。(日本園藝雜、27. no. 9, p. 11—19)。

199. 今井四郎－花卉の病害に就て、3。(病蟲害、2. p. 343—345)。

200. 伊藤誠哉－芍藥の銹病。【園藝(札幌) 7. no. 2, p. 8—10, 圖版1枚附】。

201. Matsumoto, T. — Impfversuche mit Melampsora auf japanischen Weiden. (Transact. Sapporo Nat. Hist. Soc. 6, p. 22—35).

202. Miyabe, K. — On the relationship of *Chrysomyxa expansa* Diet. to *Peridermium Piceae-hondoensis* Diet. (Bot. Mag. Tokyo, 29, p. 258—265).

203. 南部信方－花卉及盆栽類の病害調査、3－6, 10, 11。(病蟲害、2. p. 98－101, 191－194, 295－297, 387－388, 742－743, 922－923)。

204. 南部信方－六月の採集標本。(病蟲害、2. p. 743)。

205. 野津六兵衛－島根縣に於ける梨赤星病の中間寄主。(病蟲害、2. p.605－607)。

206. Sydow, P. & H. — Novae fungorum species, 13. (Ann. Myc. 13, p. 34—43).

207. Sydow, P. & H. — Monographia Uredinearum, 3, Heft 3.

1916 (大正5)

208. 原　攝祐－果樹病害論。

209. 堀　正太郎－植物病害講話。

210. 伊藤誠哉－樺太に於ける蝦夷松の病害。(病蟲害、3. p. 47—48)。

211. 伊藤誠哉－赤星病菌に就きて。(札幌農林、8. p. 448－468)。

212. 伊藤誠哉－赤星病菌に就きて。(病蟲害、3. p. 931－937)。

213. Jackson, H. B. — An asiatic species of Gymnosporangium established in Oregon. (Jour. Agric. Res. 5, p. 1003－1011, 2 pl.).

214. 河越重紀－Phragmidium 屬の一新種に就て。(豫報)(鹿兒島高等農林學術報告、1. p. 201—204, 圖版 1 枚附)。

215. Kern, F. D. – Japanese species of Gymnosporangium. (Mem. N. Y. Bot. Gard. 6, p. 245—252).

216. 松村任三－改訂植物名彙、後編、和名之部。

217. 三宅市郎－桑の菌類に就て。(蠶業試驗場報告、no. 5)。

218. 瀧元清透－朝鮮に發生する主なる病害。(病蟲害、3. p. 28－30)。

1917 (大正6)

219. Arthur, J. C. – Relationship of the genus Kuehneola. (Bull, Torr. Bot. Club, 44, p. 501—511).

220. Dietel, P. – Ueber einige neue oder bemerkenswerte Arten von Puccinia. (Ann. Myc. 15, p. 492－494).

221. 原　攝祐－尾張篠島の寄生菌。(植物研究雜、1. no. 4, p. 99—102.)

222. 原　攝祐－竹類の病害菌に就て。(大日本山林、no. 413, p. 54—63)。

223. 原　攝祐－オホズミの赤星病の新發見。(大日本山林、no. 419, p. 13－18)。

224. 伊藤誠哉－赤星病菌に就きて、2。(札幌農林、9. p. 33—57)。

225. 伊藤誠哉－赤星病菌に就きて。(續)(病蟲害、4. p. 15—19, 91－94, 177—184, 243－247, 325—330)。

226. 笠井幹夫－「フラグミチウム」屬の分類に就きて。(病蟲害、4. p. 833—836).

227. 南部信方－東京附近に於ける銹菌類の寄生時期に就て。(病蟲害、4. p. 597－600)。

228. Rees, C. C. – The rusts occuring on the genus Fritillaria. (Amer. Jour. Bot. 4, p. 368–373).

229. 齋田功太郎、佐藤禮介－最新圖說內外植物誌（初版）。

230. 澤田兼吉－臺灣菌類資料、13。（臺灣博、no. 30, p. 1–7）。

231. 澤田兼吉－臺灣菌類資料、14。（臺灣博、no. 31, p. 128 –135）。

232. 白井光太郎、三宅市郎－日本菌類目錄、第2版。

233. Sydow, P. & H. – Novae fungorum species, 15. (Ann. Myc. 15, p. 143–148).

1918 （大正7）

234. 石川瀧太郎－梨赤星病問題に就て。（病蟲害、5. p. 960–972）。

235. 伊藤誠哉－邦產菌類の學名に就て、1。【植雜、32. p. (206)–(208)】。

236. 澤田兼吉 (Sawada, K.)－栽培薔薇に寄生する一新銹菌。(A new rust-fungus parasitic on the cultivated rose)【札博 (Transact. Sapporo Nat. Hist. Soc.) 7, p. 30–40, with English Résumé】.

1919 （大正8）

237. 藤黑與三郎－臺灣產栽培植物の銹病菌に就て。（病蟲害、6. p. 364–367, 444–448, 518–523）。

238. 原　攝祐－梨の三方赤星病の研究。（病蟲害、6. p. 681–687, 751–756）。

239. Matsumoto, T. – Some experiments with Melampsora in Japan. (Ann. Missouri Bot. Gard. 6, p. 309–316).

240. 澤田兼吉－臺灣產菌類調查報告、第1編。（臺灣總督府農事試驗場特別報告、no. 19）。

241. 澤田兼吉－臺灣菌類資料、20.（臺灣博、no. 44, p. 1–9）。

242. Sydow, P. & H. – Mykologische Mitteilungen. (Ann. Myc. 17, p. 33–47).

243. Tanaka, T. – New Japanese fungi. Notes and translations, 7. (Mycologia 6, p. 148–154).

244. 鶴田章逸－麥類の病蟲論。（病蟲害、6. p. 140–144, 222–226）。

1920 (大正9)

245. 秋山忠次郎－銹菌に寄生する寄生菌に就て。(病蟲害、7. p. 502－503)。

246. 原　攝祐－オホズミの赤星病。(「山林靜岡縣」5. p. 5－6)。

247. 原　攝祐－蔬菜花卉の病氣と其豫防法。

248. 原　攝祐－梨赤星病中間宿主問題。(病蟲害、7, p. 556－562)。

249. 出田　新－麥の銹病の大發生。(病蟲害、7. p. 389—392)。

250. Sydow, P. & H. — Notizen ueber einige interessante oder wenig bekannte Pilze. (Ann. Myc. 18, p. 178—187).

1921 (大正10)

251. 原　攝祐－靜岡縣菌類管見、6。(靜岡縣農會報、no. 280, p. 24)。

252. 原　攝祐－靜岡縣菌類管見、12。(靜岡縣農會報、no. 286, p. 47—48)。

253. 原　攝祐－靜岡縣菌類管見、13。(靜岡縣農會報、no. 287, p. 51－52)。

254. 川上孝一郎－梨赤星病菌の接種試驗。(川上孝一郎遺稿植物病理論文集、p. 177－183, 圖版 1 枚附)。

255. 南部信方－庭樹盆栽類の病害に就て。(病蟲害、8. p. 200－202, 400－401)。

256. 南部信方－天狗巣病並に苗木病害菌に就て。(病蟲害、8. p. 553－555)。

257. 南部信方－果樹類の病害。(病蟲害、8. p. 605—606)。

258. 澤田兼吉－臺灣菌類資料、23。(臺灣博、no. 54, p. 6—14)。

1922 (大正11)

259. Dietel, P. — Einige neue oder bemerkenswerte Uredineen. (Ann. Myc. 20, p. 293—295).

260. Itô, S. — A preliminary report on the Japanese species of Uromyces. (Ann. Myc. 20, p. 81—85).

261. Itô, S. — Uromyces of Japan. (Jour. Coll. Agric. Hokkaido Imp. Univ. 11, p. 211—287, 3 pl.).

262. 南部信方－庭園樹木の病害に就て。(病蟲害、9. p. 189)。

263. 澤田兼吉－臺灣產菌類調査報告、第2編。(臺灣總督府中央研究所農業部報告、no. 2)。

264. Sydow, H. – Weitere Mitteilungen zur Umgrenzung der Gattungen bei den Uredineen. (Ann. Myc. **20**, p. 109–125).

265. Tanaka, T. — New Japanese fungi, Notes and translations, **12**. (Mycologia **13**, p. 282—295).

266. 栃内吉彦－小麥の褐銹菌(*Puccinia triticina*)の銹子腔時代に就て。(病蟲害、**9**. p. 63–71)。

1923 (大正12)

267. 原 攝祐－樹病學各論。

268. 宮部金吾－小麥の銹病に就て。(札幌農林、**14**. p. 179–197)。

269. Sydow, P. & H. – Monographia Uredinearum, **4**. Heft 1, 2.

1924 (大正13)

270. 原 攝祐－葱の赤銹病。(靜岡縣農會報、no. 321, p. 10 – 17, 圖版1枚附)。

271. 原 攝祐－葱の赤銹病。(病蟲害、**11**. p. 608–616)。

272. 鑄方末彥－梨の赤星病菌の種類に關する研究。(岡山縣立農事試驗場臨時報告、no. 25)。

273. 鑄方末彥、人見剛－藥劑撒布による梨の赤星病の豫防に就て。(病蟲害、**11**. p. 427–436)。

274. Sydow, P. & H. – Monographia Uredinearum, **4**, Heft 3, 4.

275. Togashi, K. – Fungi collected in islands of Rishiri and Rebun, Hokkaido. (Jap. Jour. Bot. **2**, p. 75–111, 1 pl.).

276. 富樫浩吾、平塚直秀－ノシヤツプ半島に於ける植物寄生菌類。(札幌農林、**16**. p. 73–81)。

里芋の腐敗病特に其病原菌に就て

河　村　榮　吉

A Soft Rot of Taro.

Eikichi KAWAMURA

緒　　言

著者がここに述べんとする里芋の腐敗病なるものは、細菌の寄生に因つて起る地上部の軟化腐敗病であつて、本病は既に早くより知られ且本邦各地に發生せるものの樣である。初め被害の莖葉は黄變し、葉は稍卷縮し次で葉柄部は先端より暗綠色水浸狀に變じ漸次下方に及び淡黄褐色となつて軟化腐敗する、爲に地上部は倒伏し之に觸るれば直ちに崩壞する。多くは晚夏里芋の收穫近き頃發生し多雨の際殊に被害が甚しい。本病の病原菌に就ては未だ研究されたものがないが、原攝祐氏(1)は其著書に於て本病を記載し、*Bacillus carotovorus* Jones の寄生に原因するものならんと述べた。著者は昭和5年秋福岡縣糟屋郡に於て甚しく本病の發生せるを認めたので同地で採集した罹病葉柄部より常法に從ひ病原菌を分離し之が寄生性を確むると共に該菌に就き若干觀察する處があつた。尙里芋には塊莖を腐敗せしむる一種の病害があるが之に就ては更に研究報告したいと思ふ。

本研究をなすに當り御指導を賜つた中田教授、有益なる助言を與へられた瀧元淸透氏に感謝し、尙山本重雄氏の助力を謝する。

病　原　菌

形態的性質

普通單個時に2個連結し、ブイヨン培養では時に數個連結して短鎖狀をなす。菌體の大さは寒天培養24時間のものを石炭酸フクシンで染色したものは 1.0－1.8×0.6－0.9μ ある。2乃至9本の周生鞭毛を有して活潑に運動する。グラム氏染色法により脫色する。芽胞及包嚢を認めない。

培養的性質

寒天扁平培養　發育速にして圓形時にアミーバ狀の聚落を生じ、表面平滑にして菲薄、周圍完全し內容一樣にして桑實狀顆粒體を有する。聚落の色は反射光線で灰白色、透視すれば半透明である、粘稠性がない。

ブイヨン培養　速に溷濁し表面に被膜を生ずる。

膠質穿刺培養　刺溝内の發育は上下一様にして絲狀を呈し高層面より漸次囊狀に液化する。

馬鈴薯培養　發育良好にして絲狀を呈し表面平滑、後稍肥厚し濕光を有して淡黃白色、牛酪質である。培養基を帶橄欖褐色に變じ澱粉を消化しない。

牛乳培養　培養3日にして凝固を始め上部及管壁に乳精を分離する。カゼインを消化することがない。

リトマス牛乳培養　培養24時間にして褐色及び凝固を始め、後乳精より赤變し凝固部も共に紫赤色に變ずる。

ウシンスキー氏液培養　發育稍良好にして被膜及び沈澱を生ずるが液は粘稠にならない。

コーン氏液培養　僅に發育して培養液を着色しない。

コーン氏寒天培養　發育中庸で結晶を生じない。

蒟蒻(食用)　發育微弱で軟化しない。

生 理 的 性 質

酸素の要否　ブフナー氏の裝置で發育しない。併し醱酵管培養では閉管部で僅に發育する。

醱酵管培養　1%の葡萄糖・蔗糖・乳糖・麥芽糖又は硝酸加里3%のグリセリンを添加したペプトン水に培養する時は開口部では何れも良く發育し、グリセリンの他は閉管部にても僅に發育する、何れの場合にも瓦斯を發生しない。

還元作用　硝酸鹽を還元する。

硫化水素　生成する。

インドール　反應がない。

含糖培養基に於ける酸の生成　種々の糖類を含む培養基で酸を生ずる。

食鹽に對する抵抗力　8.0%の食鹽加ブイヨンで發育し8.5%では發育しない。

日光に對する抵抗力　初夏の日光に2時間曝露する時は死滅する。

乾燥に對する抵抗力　鹽化石灰を用ひた乾燥器中で18時間後死滅した。

培養基の反應の變化　Dunhum 氏ペプトン水を酸化する。

培養基の反應と菌の發育　ブイヨンの反應 PH 5.4 で發育せず。PH 6.0 で發育する。

溫度との關係　最低溫度攝氏8度以下、最高溫度同41度、最適溫度同32－

33度、死滅溫度同51度。

分泌酵素　Jones氏法 (5.6) に倣つて蘿蔔の切片を無菌的にペトリ皿中に入れ其上に寒天層を作り、之に本菌を植付け24時間30度に保つた、後寒天層を取去り飴色に變ぜる蘿蔔の一部を取り之を鏡檢したるに細菌の存在を認めず、細胞間膜分解せられて組織崩壞せるを認めた。卽ち本菌の分泌したPectinase が寒天層を滲透して蘿蔔に作用したものと認めらるる。

グループナンバー　221.2223032

寄　生　性

本菌を以て里芋の葉柄部に穿針接種したるに5乃至7日にして接種部暗綠色水浸狀となり軟化倒伏した、又植木鉢に栽植せる里芋の塊莖に同樣の接種を試み2週間乃至1月後檢したが特に發病と認むべき結果を得なかつた。本菌は又胡蘿蔔及蕪菁の根部・蕃茄果實・馬鈴薯及び煙草の葉部に寄生し之等を軟化せしめた。

結　　論

植物軟化細菌で周生鞭毛を有し寒天基上白色の聚落を生ずるものとして從來知られたものは二三に止まらないが、著者が里芋より分離した細菌は、其等の中 Townsend 氏 (11) が最初カラより分離記載した *Bac. aroideae* Townsend 及び Jones 氏 (3,4) が胡蘿蔔より分離した *Bac. carotovorus* Jones に類似し、兩者中特に *Bac. aroideae* Townsend に一致するものの如くそのグループナンバーは全く符合する。

由來 *Bac. aroideae* (group number Bac. 221. 2223032) と *Bac. carotovorus* (group number Bac. 221. 1113032) とは瓦斯發生の有無以外には其性質が酷似してゐる爲、これが異同に就ては議論がないではない。Harding, Morse 兩氏 (2) は甘藍・花椰菜・蕪菁の腐敗病菌の多數系統に就き廣汎な研究を行つた結果、糖類醱酵の有無に依て之等細菌を六群に分ち共中二群は夫々 *Bac. aroideae* 及び *Bac. carotovorus* に一致するもので氏等は此等六群はすべて植物學上の單一種の變異體と思考した。其後 Massey 女史 (8) は *Bac. aroideae* と *Bac. carotovorus* の比較研究を行ひたる結果、兩者は極めて近緣の關係にあるが、尙別種として保留すべきを提唱し、Link, Taliaferro 兩氏 (7) は血淸反應に依て兩菌が異なることを證した。瀧元淸透氏 (10) は馬鈴薯其他數種植物の腐敗病菌に就き研究し、*Bac. aroideae* に一致するものと *Bac. carotovosus* に類似するものとを得た。尙 Smith 氏 (9) によれば

Bac. oleraceae Harri 及び *Bac. omnivorus* van Hall は *Bac. carotovorus* と同一にして *Bac. melonis* Gidd. は *Bac. aroideae* と一致するものならずやと言へば氏も亦兩者を別種として認めたのであらうか。如斯諸家の研究によれば未だ *Bac. aroideae* が *Bac. carotovorus* と同一なりとの結果なきを以て著者は尙兩者を別種として保留するを妥當なりとするものである。

著者は著者の菌と Smith 氏より中田教授に送付し來つた *Bac. aroideae* とを各種の點に就き比較したが、兩者は良く一致するものであつた。

著者は以上の結果よりして里芋の地上部腐敗病病原菌を *Bac. aroideae* Townsend に歸せんとするものである。(於九州帝大農學部植物病理學教室)

文　　献

1 原　攝 祐 (1930): 實 驗 作 物 病 理 學 743－744頁

2 Harding, H. A. and Morse, W. J. (1910): Vermont Agri. Exp. St. Bull. 147. p. 243—279.

3 Jones, L. R. (1901): Centralbl. Bakt. u. Par., 2. 7; 12－21, 1—68.

4 Jones. L. R. (1901): Thirteen Ann. Rep. Vermont Agri. Exp. St. p. 299－332.

5 Jones. L. R. (1905) Centralbl. Bakt. u. **11**, 14, 5. p. 257－272.

6 Jones. L. R. (1910) Vermont Agric. Exp. St. Bull. 147, p. 283－356.

7 Link, G. K. K. and Taliaferro, W. H. (1928) :Bot. Gaz. **85**: 198－207.

8 Massey, A. B. (1924) :Phytopath. **14**, p. 460－477.

9 Smith, E. F. (1920): Bacterial Diseases of Plants, p. 239－240.

10 瀧元清透 (1927): 農業及園藝、第3卷、843—852; 967－976頁.

11 Townsend, C. O. (1904): U. S. Dep. Agr. Bur. Pl. Ind. Bull. 60.

日本菌類志料 二

原　　　攝　　祐

Materials for the Fungus-flora of Nippon 2.

Kanesuke HARA

7 Meliola Osmanthi-aquifolii Hara, n. sp. (Pl. 2, Fig. 1–4)

斑點は葉の表面生である、最初は圓形にして灰黑色、大さ 1—2 mm. 位あれども、後漸次擴大し、且つ近接するもの互に癒合して極めて不規則なる斑點を形成し、墨黑色となり、毛茸狀を呈するに至る。菌絲は絲狀にて幅 6 – 10μ あり、8 – 12μ 位互に隔膜があり、分岐し、又側面に Hypopodia を發出する、Hypopodia は楕圓形又は倒卵形にして頂端は圓く、通常 1 個の隔膜があり、大さ 14—22×9 – 11μ ある。剛毛は針狀にて頂端尖り隔膜があり基部は多少太く暗黑色にして大さ 120—330×6.6—8.8μ ある。子嚢殼は扁球形又は球形を呈する暗黑褐色にして大さ 150 – 250μ ある、殼壁は極めて大なる多角形の細胞より成る、故に表面は極めて凹凸がある、細胞の大さ 20—33μ ある。子嚢は初め圓筒形なれども漸次膨大し倒卵形、楕圓形又は卵形をなし無色である、中には小柄を有するものがあり、頂端は圓い、大さ 55 – 66 ×28—35μ ある。胞子は 1 子嚢中に 2 個ありて楕圓形、圓筒形又は長卵形をなし隔膜が 4 個あつて 5 細胞をなし、隔膜部にて著しく縊れ兩端は圓い、內に大なる油球がある、暗褐色にして大さ 40—48×14—22μ ある。

ヒ ヒ ラ ギ　　(*Osmanthus aquifolium*) の葉上に生ずる。

靜岡縣伊豆下大見村　　昭和 6 年 2 月 16 日　　(原　攝　祐)

此菌は *Meliola amphitricha* Fries に最も類似するも、胞子は長さ短く且つ幅廣きを以つて區別せらるる、又澤田兼吉氏によると *Meliola amphitricha* 菌は 1 子嚢中に胞子が 2 – 4 個含まるると云ふことであるが、我菌は必ず 2 個に限られて居る。又 *Meliola Butleri* Sydow なる菌が柑橘に寄生する、此菌は印度、臺灣及靜岡縣に分布する、子嚢殼は球形であり、胞子は大さ 33—40

×13－17μ あつて我が菌よりは少しく小さく胞子の兩端は少しく突形をなす目下 Phaeosaccardinula 屬せしめてある、又我が菌は殼壁の構成細胞が極めて大なる特徴がある故に *Meliola Osmanthi-aquifolii* Hara, n. sp. Spots black, orbicular, often confluent. Mycelium dark-brown, septate, with the hypopodia. Perithecia globose or depressed-spherical, 120－330μ diam., astomous, surrounded by stout. Asci oval, 2－spored, 55－66×28－35μ. Spores oblong or broad-cylindrical, dark-brown, 4— septate, constricted at the septa, 40－48×14－22μ. と命名する。

8 Limacinia japonica Hara (Pl. 3, Fig. 7－10)

Limacinia japonica Hara 實驗作物病理學 p. 559, Fig. 219

最初褐色粉狀の斑點を生ずる、此斑點は漸次擴大すると同時に厚くなり、且つ互に相癒合して葉の表面一面に擴大するに至ると同時に稍灰色を帶び來り、其面に黑色小粒點を密布する。菌絲網は暗褐色の菌絲密に集合し、稍菌柔組織狀をなす、細胞の大さ 4—6μ ある。Hypopodia を有しない。子嚢殼は球形又は扁球形にて直徑 120 — 170μ あるも普通 150μ 位の大さあるものが最も多い、菌絲網中に埋沒し、半分位を露出する、殼壁は細胞膜質にて其構成細胞は多角形にて大さ 5－10μ あり、口孔部は平かなるか又は少しく突出する、口孔は圓きか又は少しく不規則形にして若きものは 10μ 位あれども古くなれば 30μ 位に達するものがある、又殼壁上には剛毛を被むる、剛毛は針狀にて多數發出する、大さ 66－220×3—7μ ありて單胞、單一である、暗褐色を呈する。子嚢は卵形、楕圓形又は紡錘形に近く頂端は圓く、基部は細まつて居る、4—8 個の胞子を束生する、大さ 46—66 × 15.4－35μ ある、頂端は厚膜をなす。胞子は長棍棒狀、圓筒形又は蠕蟲狀をなす、上部少しく太く基端に向ひ稍細まつて居る、兩端は圓く隔膜が 6 － 7 個ある、無色にして隔膜部にて縊る、內に油球 2 － 3 個宛を有する、眞直又は少しく彎曲するか屈曲する、大さ 28—37×5—8μ ある。

ウンシユウミカン (*Citrus unshiu*) の葉・葉柄・小枝・枝及果實上に生ずる *Lecanium oleae* ? の分泌物上に寄生する

靜岡市外有度村	昭和 6 年 5 月	(靜岡縣立農事試驗)

ウンシユウミカン (*Citrus unshiu*) の葉上

靜岡縣淸水市	昭和 6 年 5 月	(原　攝　祐)

サ カ キ (*Eurya ochnacea*) の葉枝上の「ルビーロウムシ」*Ceroplastes*

rubens の分泌物上

靜岡縣靜岡市淺間神社境內　昭和6年5月　　（原　攝　祐）

ヒサカキ　(*Eurya japonica*) の葉小枝上

靜岡縣靜岡市熊野神社境內　昭和6年5月25日　（原　攝　祐）

アラカシ　(*Quercus glauca*) の葉上

靜岡縣靜岡市熊野神社境內　昭和6年5月25日　（原　攝　祐）

本菌は靜岡縣では比較的廣く分布するもので、又各種の常綠植物に發生する、著者は柑橘に發見して上記の學名を附し拙著作物病理學559頁に219圖を附して發表した。而して此菌は寄主と介殼蟲の種類により多少形態を異にする樣であるが、之を互に並例比較すると其間に連絡があつて異種とすることが出來ない、故に著者は之等を皆同一たるものと認めて置くが type specimen はウンシユウミカン（Citrus unshiu）で靜岡縣有度村の產である、此菌は又農林省桑名博士の許にも多數標本が保存されて居る筈である。

其命名記は次の樣である Mycelium amphigenous, braodly and irregularly effused. Hypha thick, branched, septate, 4 — 6 μ thick, non hypopodia. Perithecia spherical or depressed-globose, 120 — 170 μ diam., membranaceus, ostiolate, clothed with spreading bristles. Asci ovate or elliptical, 4 – 8 — spored, 46 - 66 × 15.4 – 35 μ. Spores vermiform or cylindrical, 6 – 7 — septate, hyaline, straight or curved, 28—37 ×5—8 μ.

9　Hypocapnodium mikanum Hara (Pl. 3, Fig. 16 – 18.)

Hypocapnodium mikanum Hara 實驗作物病理學 p. 557. 1930.

Meliola Citri (Briosi et Passelini) Saccardo　果樹　大正9年1月號

原　實用作物病理學　p. 311.　大正14年6月

斑點は葉、枝幹及果實に發生する、初め葉の表面に薄墨を流したるが如き不



溫州蜜柑の葉に煤病 Hypocapnodium mikanum Hara を生じたるところ
（原圖）

正形の小なる斑點をなすも、此斑點は漸次擴大して葉の表面全面に達し、暗黑色粉狀をなし、遂には黑紙片の如き狀態をなするに至るものである。菌絲は絲狀をなし分岐する、隔膜を有し中に油球を有するものがある生長點は無色である、後暗褐色となる幅3－7μ ある、又菌絲の中に比較的纖細なるものと太きものとある、太き菌絲は距離近く隔膜を生じ、其部にて縊れ念珠狀をなし、遂に切れ去るか、又2－3個連結する、1個の細胞は暗褐色にして內に1－2個の油球を有するもの、又は平滑なるもの、或は隔膜を有するもの等がある、大さ 10－20×7－9μ ある、之と相混じて Triposporium 型の胞子を有する、3又は4方に放射狀に分岐し、其分岐點太く先端は尖つて居る、隔膜2－3個を有する、最初無色なれども後暗褐色となる、大さ 30－65×4－7μ ある、又1種球形又は楕圓形、暗色厚膜なる細胞が2－4個連結して細菌の「サルシナ」狀をなす、1個の細胞は直徑7－11μ ある。子殼は菌絲網中より生じ群生する、圓筒狀又は棍棒狀、單一にて中途又は頂端部に膨大部を生ずる、先端圓く後裂開する、大さ 300－500×20－03μ，頭部は大さ 40－70μ ある、其構成細胞は菌絲束狀をなす、暗褐色である、膨大部は子室にして中に柄胞子を生じ、成熟すれば頂端を總狀に裂開して噴出する。柄胞子は楕圓形、卵形にて兩端圓く眞直又は少しく彎曲するものがある、大さ 3－6×1.5－2μ あり、無色である。Chaetophoma 型子殼は菌絲網中に密に集合して埋沒し、球形又は扁球形で直徑 120 － 200μ ある、殼壁は若きときは多少菌絲の集合體狀をなせども後多角形細胞となる、表面に剛毛を被る、頂端に口孔を有する。柄胞子は楕圓形、圓筒形又は多少卵狀をなし、大さ 3－6×1.5－2μ ある。子囊殼は球形又は扁球形にて直徑 110 － 150μ 稀れに 250μ のものがある、殼壁は膜質にて暗褐色である其構成細胞は 6 － 8μ ある、頂端に口孔がある、口孔は圓くて 15 － 20μ ある、表面に剛毛を有する、剛毛は針狀にて單一單胞である、大さ 60－150×3－4μ ある。子囊は長卵形、圓筒形又は棍棒狀をなし8個の胞子を2列に有する、大さ 60－80×12－20μ ある、頂端は圓く基部に小柄がある。胞子は長楕圓形又は紡錘形で兩端は細まり、3個の隔膜があり、大さ 20－25×6－8μ ある、無色である。

「ネーヴルオレンヂ」　(*Citrus sinensis-brasiliensis*) の葉枝幹上

靜岡縣靜岡市　大正8年4月25日　(原　攝　祐)

ウンシユウミカン　(*Citrus unshiu*) 葉・枝幹上

靜岡縣靜岡市　昭和6年5月　(原　攝　祐)

大正8年著者は本病菌の子囊胞子を發見して *Meliola Citri* (Briosi et

Pass.)Sacc.に當てたのである、其際多數の顆粒の存在するものを細胞と見たのであるが此菌は何時も4細胞3隔膜であるから區別の要あることを知つた、又澤田氏の *Hypocapnodium strigosum* とは斑點の形態、色澤及子囊殼並に胞子の形態大さに異る所がある、故に *Hypocapnodium mikanum* Hara, n. sp. Mycelium widely effused, covering the whole surface of the leaves and branches. Hypha filiform, septate, brown, branched, 3–7 μ thick, without hypopodia. Conidia of Triposporium type aspellate, with 3 or 4 arms. Picnidium globose or depressed-globose, 150 – 200 μ diam., bristly. Stylospores elliptical or ovate, 3–6×1.5–2 μ, hyaline. Perithecia spherical or depressed-globose, 110 - 150 μ diam., membranaceus, ostiolate, bristly. Asci ovate, cylindrical or clavate, 8—spsred, 60–80×12–20 μ. Spores elliptical or fusiform, 3—septate, hyaline, 20–25×6–8 μ. と命名した。

10 Hypocapnodium quercifolium Hara, n. sp.

(Pl. 3, Fig. 15–16.)

斑點は葉の表面に現出し、最初は灰暗色薄き粉狀の不正形の小斑點をなすも、此斑點は漸次擴大して葉の面を覆ふに至り、其中に黑色小粒點を散布する樣になる。子囊殼は球形又は扁球形で、直徑が160–250 μ ある、殼壁は菌柔組織狀をなし、構成細胞は不正形で寧ろ菌絲の集合の樣である、其菌絲の幅4–8 μ ある、頂端の中央に口孔を有する、口孔部は疣狀をなし古き口孔は開くて大さが15–30 μ ある、表面に剛毛を多數被むて居る、剛毛は針狀で基部大く頂端は稍尖り、單一、單條で大さ28–67×3–4 μ あり暗色である。子囊は倒棍棒狀、圓筒狀又は長卵形をなし、頂端は圓く基部に近き部分に膨大部がある基部に小柄がある、8個の胞子を稍2例に含有する、大さ80 – 100×12 – 20 μ ある。胞子は紡錘形、卵形又は楕圓形であるが、兩端は細まつて居る、初め單胞、無色であるが後には3個の隔膜が出來、無色で大さが20—28× 5 - 8 μ ある、菌絲は纖細で暗褐色多くの隔膜があり、分岐し幅が2–5 μ ある、Hypopodia を具有しない。

ア ラ カ シ (*Quercus glauca*) の葉上

靜岡縣小笠郡西鄉村　　昭和5年5月1日　　(原　攝　祐)

シ ロ カ シ (*Quercus myrsinaefolia*) の葉上

靜岡縣安倍郡有度村　　昭和6月6月　　(原　攝　祐)

此菌は柑橘類の煤病菌である *Hypocapnodium mikanum* に類似して居る

が胞子の形態と隔膜數が異から新種と認めて *Hypocapnodium quercifolium* Hara, n. sp. Spots black, pulverulent, covering the whole surface of the leaves. Mycelium without hypopodia. Perithecia globose or depressed-spherical, 160 – 250 μ diam., membranaceus, ostiolate, dark-brown, with spine-like bristles. Asci abclavate, cylindrical or oval, 8-spored, 80 – 100 × 12 – 20 μ. Spores fusiform, oval or elliptical, 3-septate, hyaline, 20 – 28 × 5 – 11 μ. と命名する。

11 Aithaloderma Phyllostachydis Hara, n. sp.

(Pl. 3, Fig. 19 – 22.)

斑點は葉及枝に出で暗色又は暗煤色の薄き皮膜狀にて不規則形をなすも後全部表面を覆ふことがある。菌絲は其若きものは纖細無色太さ 2 – 3 μ あれども直に暗褐色となり、隔膜を生ずる、其間隔 6 – 12 μ ある、又太きものは 5 – 10 μ の幅あるものがある、後隔膜部より切斷して球形又は楕圓形をなす、大さ 35 – 45 × 6 – 8 μ ある、隔膜 2 – 4 個あり、暗褐色である。子嚢殼は球形にして直徑 10 – 150 μ あり、暗褐色にて革質、破れ易い、表面に多數の剛毛を有する。剛毛は針狀又は絲狀にて大さ 80 – 100 × 3 – 4 μ ある、厚膜、暗褐色にて單一なるを常とする、基部は球形をなし 6 – 8 μ あり頂端は尖らない、口孔は不明瞭である。子嚢は叢生し、披針狀、長卵形又は倒棍棒狀をなし頂端細まり先端は截形をなすを常とする、基部に小柄があり、8 個の胞子を有し、大さ 48 – 66 × 14 – 16 μ ある。胞子は圓筒狀、紡錘狀又は楕圓狀をなす、最初 2 細胞にて中央より少しく一方に片寄り 1 個の隔膜があり、小なる細胞は稍廣い後大なる細胞に尙ほ 1 個の隔膜を生じ、3 細胞 2 隔膜となり、稍中央部最も太く兩端に向ひ細まる、先端は圓い、大さ 17.6 – 23 × 5 – 7 μ 無色である、菌絲中に剛毛を並立する、剛毛の頂端部楕圓形をなし基部は柄狀をなし、暗黑褐色である、大さ 600 – 900 × 15 – 20 μ 太き部は 30 – 40 μ ある。

マダケ (*Phyllostachys reticulata*) の葉・小枝上
　靜岡縣小笠郡西鄕村　昭和 5 年 5 月 20 日　(原　攝　祐)
同　上
　靜岡縣靜岡市熊野神社境內　昭和 5 年 5 月　(原　攝　祐)
メダケ (*Arundinaria Simoni*) の葉・小枝上
　靜岡縣靜岡市熊野神社境內　昭和 5 年 5 月　(原　攝　祐)

Aithaloderma 屬に隷するもので本病菌に類似するものもなく又竹亞科 (Bambusae) に屬するものの中に同屬に隷する菌の發見がない、故に著者は

之を新種と認めて *Aithaloderma Phyllostachydis* Hara, n. sp. Spots black, covering the whole surface of the leaves and twigs. Perithecia globose, 120－150 μ diam., dark-brown, membranaceus, with spine-like bristles. Asci lanceolate, long-ovate or clavate, rounded at the apex, stipitate, 8－spored, 48－66×14－16 μ. Spores cylindrical, fusiform or elliptical, 2－septate, hyaline, 17.6－23×5－7 μ. と命名する。

12 Aithaloderma Camelliae Hara, n. sp. (Pl. 4, Fig. 8－11.)

斑點は暗黒色にして不規則形をなして葉の表面に散布するが此斑點は漸次大さを増し遂に葉の全面を覆ふに至ることがある、時として極めて黒色となり微小なる粒點を密生するに至るものである。

子嚢殼は球形又は扁球形で大さが 80—130 μ もある、頂端は圓くて中央に口孔がある、口孔は平で其裂孔は 15—20 μ の廣さがあり、寄主に附着する方は多少扁平である。殼壁は緻き網狀で暗褐色又は黄褐色である、其構成細胞は場所によつて不同であるが、幅凡そ 4—10 μ である、表面特に口孔に近き部分に剛毛がある、剛毛は針狀で暗褐色又は黒色で單一單胞？で大さが60—100×3－5 μ ある。子嚢は 15—17 個叢生し長卵形、卵形又は棍棒狀で頂端は圓く基部に小柄を有することがある、大さが 32—50×16—24 μ ある、無色である。胞子は子嚢中に 2－5 個不規則に束生する、棍棒狀、紡錘形又は圓筒形である、大さが 19—38×5—7 μ ある、最初 2 胞で稍中央に隔膜があるが各胞に 2—3 個の隔膜を生じて總計 5—6 個の隔膜となる、頂端は圓みがあつて其部に近く膨れて居る、各胞に油球を 2－5 個位を有する無色である。菌絲は膜狀に結合して幅が 4—6 μ ある、黄褐色である、之に混じて楕圓形に大さ 2－3×1.5－2 μ の柄胞子を生ずる。

ツ　バ　キ　　(*Camellia japonica*) 葉上に寄生する

静岡縣清水市　　　　昭和 6 年 7 月 19 日　　　　(原　　攝　　祐)

ツバキの類に寄生する Meliola 其他の類似菌は數種あるが一も之に吻合するものがない、故に著者は之を新種と認めて *Aithaloderma Camelliae* Hara, n. sp. Spots black, irregularly, covering the whole surface of the leaves. Perithecia spherical or depressed-spherical, 80－130 μ diam., memdranaceus, dark-brown, ostiolate, with straight black bristles around the apex. Asci long-oval, ovate or clavate, stipitate, 32－50×16－24 μ, 2－5－spored. Spores clavate, fusiform or cylindrical, 5－6－septate,

19－38×5－7μ, hyaline. と命名する。

13 Aithaloderma japonica Hara, n. sp. (Pl. 3, Fig. 23--26.)

斑點は表面生にして暗灰色又は暗色を呈する、薄く粉狀にて廣く擴がり遂に葉面を覆ふに至るものである。菌絲は線狀又は絲狀にて分岐し、隔膜があり暗褐色にして4－7μの幅がある。子囊殼は散布し又は群生す、球形又は扁球形にて大さ220－286μある、殼壁は細胞膜質より成り、其構成細胞は多角形にして大さ4－6.6μあり、口孔は平くして開く、直徑40－60μある。子囊は倒卵形、卵形又は紡錘形にして多くは頂端圓く、基部に小柄がある、8個の胞子を束生する、大さ75－88×22－44μある。胞子は紡錘形又は圓筒形にて兩端細まり、先端は細く嘴狀に突出する、隔膜が7個あり其部にて縊れて居る、無色にして彎曲するを普通とするも眞直なるものがある、大さ55－70×8.8－11μある。

アラカシ (*Quercus glauca*) の葉に寄生する

靜岡縣小笠郡西郷村　　昭和6年5月21日　　(原　攝　祐)

尙ほ27圖に示したるが如き棍棒狀にして44－11μ位の胞子を生じ中に縱隔膜を生ずるものを見ることがある、且子囊は棍棒形、倒卵形で基部に小柄があり、大さ66－77×24－30μあるが之は本種から除いて置く。而して本菌に類する同屬の菌が無いから之を新種と認めて *Aithaloderma japonica* Hara, n. sp. Spots darkish-gray or dark, irregularly, pulverous. Mycelium filiform, branched, septate, dark-brown, without hypopodia. Perithecia scattered or gregarious, spherical or depressed-globose, 220－285μ diam., membranaceus, dark-brown, ostiolate. Asci abovate, oval or fusiform, stipitate, 8－spored, 75－88×22－44μ. Spores fusiform or cylindrical, 7－septate, constricted at the septa, hyaline, curved or straight, 55－70×8.8.－11μ. と命名する。

14 Antennella citrina Hara, n. sp. (Pl. 4, Fig. 1－7.)

斑點は葉、枝等の表面に現出し、初め暗黑色圓形又は不正形で粉狀を呈するが、此斑點は漸次擴大して葉面全部に達することがある、黑色で厚く又極めて毛茸狀を呈して居る。菌絲は絲狀で暗赤褐色で隔膜を有し、分岐する、幅が3－4μある、菌絲は極めて密に結合して膜狀を呈する、菌絲は念珠狀に縊斷して分生胞子を生ずる。分生胞子は暗褐色、厚膜で直徑が6－8μあつて球形である。子殼は圓筒形又は不正形で單一又は分枝する、長さ400－800μ

あり、太さ種々で15－40μ位ある、其中途又は頂端が卵形又は楕圓形に膨大して子殼となる其直徑が25－50μあり、頂端は裂片狀となつて居る、組織は縦走菌絲の結合した樣に見ゆる。柄胞子は楕圓形又は卵形で無色、平滑で大さ2－3×0.8－1μある、兩端は圓い。子囊殼は柄を有するか又は缺く柄は10－400μ位のものがあり、幅は15－25μある、子囊殼は球形又は卵形で直徑が60－110μある、殼壁は細胞膜質で構成細胞は多角形で、大さ4－8μある、明瞭なる口を有しないが、時として膜薄くて裂孔狀に見ゆることがある暗褐色である。子囊は卵形又は倒棍棒狀稀に棍棒狀のものがあり、頂端は厚膜で圓く、基部に小柄がある、3－6個の胞子を束生する、大さ50－60×12－20μある。胞子は棍棒狀又は線蟲狀で上端は稍太く、下端は漸細する傾向があるが之をよく視察すると上から第二の細胞が最も大で、之を中央として兩端に向ひ漸細して居るが、兩端は圓い、隔膜が5個あつて其部にて縊れて居る無色平滑で、大さが36－40×6－7μある。

ウンシュウミカン　(*Citrus unshiu*) の葉枝梢に寄生する
神奈川縣　昭和6年7月

神奈川縣地方に發生する煤病に Capnodium 型のものがあつたが其子囊世代が明でなかつた故に假に *Capnodium salicinum* Mont. に當てて作物病害標本第3號に入れたのが明治42年であつた。爾來同菌につき研究の機會を得なかつたが、本年7月神奈川縣下足柄郡眞鶴町の柑橘視察員が被害標本を携へて著者を訪はれたことがある、其際の標本をよく視たところ先年曾我村附近で觀察したものによく似て居たので詳細調査したところ Capnodium 型であり且つ Capnodium 屬とは胞子に異る點があるので Antennella 屬に隷せしむることにした。而して同屬に隷する菌に之に類似したものがない、故に新に *Antennella citrina* Hara, n. sp. Spots black, orbicular, often confluent, covering the whole surface of the leaves and twigs, tomentose. Mycelium filiform, septate, branched, 3－4μ thick, without hypopodia. Picnidium cylindrical, simple or branched. Stylospores elliptical or oval, hyaline, 2－3×0.8－1μ. Perithecia spherical or egg-shaped, 60-110μ diam., membranaceus, thinned at the apex, with simple or branched stipe. Asci oval or abclavate, rounded at the apex, stipitate, 3－6--spored, 50－60×12－20μ. Spores clavate or vermiform, 5－septate, hyaline, 36－40×6－7μ. の種名を命ずることにした。

15 Treubiomyces japonicus Hara, n. sp. (Pl. 3, Fig. 5–6.)

斑點は暗灰色、粉狀をなし、葉の表面に薄く擴がつて居る、菌絲は絲狀にて隔膜を有し幅 3–6 μ あり暗褐色である。子嚢殼は球形にて裸、直徑 150–250 μ ある、殼壁は細胞膜質より成り其構成細胞は 3–7 μ ある。子嚢は楕圓形又は卵形をなし、頂端は圓く基部に小柄がある、内に 3 個の胞子を含有し、大さ 75–80×35–40 μ ある。胞子は楕圓形又は圓筒形で、兩端圓きか又は少しく一方に彎曲する、内に縱横に隔膜を有し煉瓦壁狀をなして居る、無色又は淡黄色で大さ 36–56×15.4–22 μ あるが、中には 75×18 μ の如き長いものがある、胞子の不同なのは 1 個の子嚢の中で 1 個の胞子が非常によく發育すると他の 1 又は 2 個は極めて小さいのであるからであらう。

アラカシ (*Quercus glauca*) の葉上に寄生する

靜岡縣小笠郡西鄕村　　昭和 5 年 5 月 21 日　　(原　攝　祐)

本 Treubiomyces 屬に隷するもので本菌に類似するものを認めない、故に之を新種と認めて *Treubiomyces japonicus* Hara, n. sp. Spots darkish-gray, pulverulent, covering the whole surface of the leaves. Mycelium filiform, branched, 3–6 μ thick, non hypopodia. Perithecia spherical, naked, 150–250 μ, membranaceus. Asci elliptical or oval, stipitate, 8– spored, 75–80×35–40 μ. Spores elliptical or cylindrical, curved, with both transverse and longitudinal septa, hyaline, 36–56×15.4–22 μ. と命名する。

圖　　解

第 3 圖版 (Pl. 3.)

- 1– 4 Meliola Osmanthi-aquifolii Hara.
- 5– 6 Treubiomyces japonicus Hara.
- 7–11 及 29–30 Limacinia japonica Hara.
- 12–15 Hypocapnodium quercifolium Hara.
- 16–18 Hypocapnodium mikanum Ha a.
- 19–22 Aithaloderma Phyllostachydis Ha-a.
- 23–27 Aithaloderma japonica Hara.

第 4 圖版 (Pl. 4.)

- 1– 7 Antennella citrina Hara.
- 8–11 Aithaloderma Camelliae Hara.

ウドンコ病に就て

本間ヤス

On the Powdery mildew

Yasu HOMMA

ウドンコ病はウドンコ菌科(Erysiphaceae)に屬する菌類に依りて原因せらるゝものにして、果樹類(林檎•梨•葡萄•李•グースベリー等)、蔬菜類(瓜類•胡蘿蔔•牛蒡等)、穀類(小麥•大麥•小豆等)、花卉類(梅•櫻•薔薇•ズミ•ホウセンクワ等)、野草類(オホバコ•タンポポ•ミチヤナギ等)及主要樹木(櫟類•桐•栗•桑•楓•檜等)等を侵すものなり、次に其の被害の相當著しきものにつきて些か述べんとす。

一 果樹類 グースベリーのウドンコ病

病原菌 *Sphaerotheca Mors-Uvae* (Schw.) Berkeley & Curtis.

本病の起原地は北米合衆國にして俗に American Goose-berry mildew 又は Goose-berry mildew と呼ばれ、1900年前後に於て歐洲に大害をなしたるものなり。本邦に於ては昭和年2年(1927年)札幌附近に於て發生し漸次各處に蔓延し、そのために廢園の止むを得ざるに到りしものもあり。

毎年新梢の5-6寸に延びたる頃、その先端に近く小さき白斑を生じ、次に果實及葉に移る、白斑は漸次褐色となり遂に黒褐色の厚き層となる、多數の子囊殼は菌絲中に埋れて生ず。

本菌の分生胞子は連鎖狀に生じ、橢圓形にして中に特種形のフイブロシン體を含有す、25.2-28.8×16.8-20μ の大きさなり。子囊殼は大さ 94-126μ にして、附屬器は單條褐色にして内に1子囊を有す。子囊中には8個の子囊胞子を藏す。

二 蔬菜類 瓜類のウドンコ病

病原菌 *Sphaerotheca fuliginea* (Schlecht.) Pollac.

盛夏の候圃場を見る時、シロウリ・マクワウリ・トウナス・ユウガホ・スイクワの畑の一面に白粉を振りかけたる如く白色に見ゆる處あり、卽ちウドンコ菌の發生に依るものにして本菌に特に夥しく分生胞子の形式せらる種類なればなり。

本菌の分生胞子は連鎖狀に生じ、楕圓形又は長楕圓形にして內にフイブロシン體と空泡とを含有し、大さ 31－33×19－22μ なり。子囊殼は概ね形成せられざる中に瓜類は枯死するに至れるものなれば採集甚だ困難なり、著者も多年注意を怠らざりしも遂に見出さず、然るに數年前偶々伊藤教授により琴似農事試驗內の圃場に栽培せる イトカボチヤ の上に於て、子囊殼の形成せるを見出されしにより、本邦產のものは明かに Sphaerotheca 屬に隸するものなる事の確證を得たり。外國に於ては瓜類には主として *Erysiphe Polygoni* が寄生し、又滿洲よりの標本によりても之と同一菌なりしなり。子囊殼は 70－112μ の直徑を有し、附屬器は單狀、下半部又は全部褐色を呈し數は普通10本前後にして數個の隔膜を備ふ、內に數個の子囊あり。1子囊中には 5—8 個の子囊胞子を含む。

三　穀類　麥類のウドンコ病

病原菌　*Erysiphe graminis* De Candolle

麥の出穗期前後に麥畑に於て丁寧に檢する時は本病に依る病斑を發見するを得べし、されど外界の狀況によりては著しく發生し相當の被害を與ふる事あり。

本病は初め葉の兩面の葉脈に添つて小さき白斑を生じ漸次發育するに從つて菌絲は稍帶紅灰色に變じ、病斑は擴大するも常に長形をなし菌層厚し、分生胞子は長楕圓狀にして連鎖狀に生じ、大さ 12×28μ にして擔子梗の基部に球狀の膨大部を有するを特徵とす。子囊殼は厚き菌層中に埋れて生じ、大さ 147—196μ にして內に10個前後の子囊を含み、附屬器は單狀、菌絲型にして基部褐色を呈す、1子囊中には8個の子囊胞子を含有し、大さ 14—19×9—15μ なり。

四　花卉類　薔薇のウドンコ病

病原菌　*Sphaerotheca pannosa* (Wallroth) Levillé.

本病は薔薇栽培家にとりては恐るべき病害なるべし、其の發生によりて新梢、新葉は萎縮して生長を防げられ、又花部に現はる時は開花を防げらる、

本菌は夥しく分生胞子を形成し、盛んに傳播するも未だ本邦に於ては子嚢殼採集せられず、分生胞子は連鎖狀に生じ、內に特殊型のフイブロシン體を含有し、楕圓狀にして、大さ 20－24×13—16μ なり。

五　野　　草　　類

秋冷の候吾人が郊外、田園、山道を通過する際稍注意を拂ふ時は必ずや白色粉末を以つて飾られたる數種の野草を目擊するを得べし。これウドンコ菌の寄生に依るもの多し、これ等は概ね Erysiphe 及 Sphaerotheca に屬するものなれば次にその主なるものを列記すべし。

Erysiphe に屬する主なるもの。

ヌスビトハギ● ヤブマメ● メドハギ● ヤブジラミ● ミヅ● ミチヤナギ● トリカブト● ヒメナミキ● ミヤマキンポウゲ● ハイキンポウゲ● アキカラマツ● エゾアザミ● カモジグサ● テンキ● オホバコ● ホヽヅキ● タムラサウ● イヌホヽヅキ● ヤヘムグラ● ヨモギ● ヲトコヨモギ● ヨメナ● アキノキリンサウ等。

Sphaerotheca に屬する主なるもの。

エゾキンミヅヒキ● ヤマブキショウマ● アカバナシモツケ● オニシモツケ● キジムシロ● ワレモカウ● ゲンノショウコ● イチゲフウロウ● クカイサウ● アカバナ● クワクサ● キツリフネ● ツリフネ● カイジンドウ● ミヤマトウバナ● シホガマギク● ノブキ● タウコギ● ヨブスマサウ等。

六　主要樹木類　桐のウドンコ病

病原菌 *Phyllactinia imperialis* Miyabe

桐の苗木時代より成木に至るまで葉の兩面を浸され、秋季に至りて落葉を速め幾分生長を害せらるるものなり。

本菌は分生胞子、子嚢殼共にウドンコ菌中の最大の種類にして子嚢殼は肉眼にて明視し得るものなり。分生胞子は幅廣き棍棒狀又はレモン型にして上部に乳頭突起を有し、大さ 24－40×60－76μ。擔子梗長くして 602μ に達するあり。子嚢殼は大なるは 364μ に達し、附屬器は 20 本前後にして針狀をなし、基部球狀に膨大す、內に 15 乃至 20 個の子嚢を含み、子嚢胞子は普通 1 子嚢中 2 個なり。

胡麻に寄生する二新菌

河　村　榮　吉

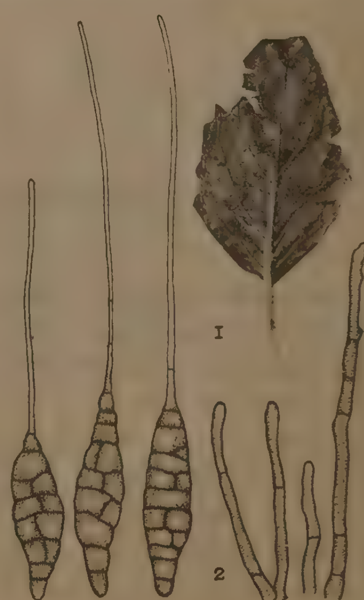
New Fungi on *Sesamum indicum* L. Eikichi KAWAMURA

緒　　言

著者は1931年9月福岡市に於て胡麻の葉に夫々異なる病斑を生ずる二種の病害を觀察した。その一は病斑と健全部の境不明瞭にして稍大形の病斑を生ずるものにして、之は Macrosporium の一種に因て起り、他の一は之と異り病斑小にして健全部との境明瞭なる Alternaria の一種に因て起るものにして、本文は之等二種の菌の分類學的位置を明かにしたものである。本研究をなすに當り御指導を賜つた中田教授、御助言と比較に供した菌の分讓とを與へられた吉井助教授に甚謝の意を表する。

1. Macrosporium に因る葉枯病

病　徴　本病は葉の表面に不整形の周邊不明瞭な暗褐色又は黒褐色の病斑を生ずる。病斑の大さは普通直徑3乃至10粍位である多くは相互に融合して、より大なる病斑を形成し、遂には全葉枯死するに至る、病斑は詳細に檢すると輪紋狀の隆起線を形成して居る。病斑の中央部は往々濃黒褐色の小點を現はして居る。葉の裏面に於ける病斑も亦表面に似て居るが之より稍淡色である。之等病徴は Helminthosporium 菌に因る斑紋病 (3) に酷似して居て誤認され易い。



病原菌　擔子梗は黃褐色で多くは單生時に叢生し通常分岐を認めない。短いものは直であるが多くは稍屈曲して居る先端は膨大せずして丸味があり、既に分生胞子の落ちたものでは胞子痕が認められる。1乃至5個の細胞よりなり、大さ 51—90×4—6 μ である。分生胞子は多くは紡錘狀であるが倒棍棒狀や圓筒狀に

近いものもあり、普通細長い頸部を有するを特徴とするが、時に殆ど頸部の無いものがある。分生胞子は黄褐色又は黑褐色（老成せるもの）で頸部は殆ど無色である。3乃至13の横隔膜と小數の縱隔膜を有し、隔膜部の縊れは甚しくないが老成せるものでは縊れが甚しい。擔子梗に着生する部分の一細胞は稍細長い、頸部を別にして測定した分生胞子の大さは30－111×9－33 μ で、長頸の大さは 30－210×2－3 μ である。

胡麻の病斑上に生ぜる本菌の分生胞子の單個培養を行ひ本菌の純粹培養を得、之を用ひて接種試驗に供したのであるが、斯くして得た本菌は乾杏寒天扁平培養に於て發育可良、菌叢濃青黑色で氣中菌絲多く底部に菊花樣斑紋を生ずる。30度2週間にして多數の分生胞子を生じたが、之等分生胞子は濃黃褐色で形態は寄主上に生ぜるものと殆ど一致してゐる、培養基上でも分生胞子の連鎖狀に生ぜるを認めなかつた。

寄生性　本菌の純粹培養を以て胡麻の葉に接種を試み常に陽性の結果を得た。卽ち9月下旬本菌の若き寒天培養の菌叢の細片を取り之を胡麻の葉に針にて穿孔せるもの又は無傷部に載せ硝子鐘にて蔽ひ濕氣を保ち溫室内に置いた處2日目には既に有傷接種部は水浸狀黑褐色に變じ之等は次第に擴大して大なる固有の病斑を形成し2週間後には再び本菌の分生胞子を生ぜるを認めた。但無傷のものは前者に比し發病遲れ對照のものには何等發病と認む可き變化がなかつた。本菌は其形態が *Macrosporium Ricini* 及び *M. Carotae* に類似し、殊に前者に於て然りである。依て著者は吉井氏より *M. Ricini* の原菌培養の分譲を受け、之を胡麻の葉に接種すると共に、胡麻の Macrosporium 菌を以つて篦麻及び胡蘿蔔の葉に接種を試みた。其結果に依れば *M. Ricini* は胡麻に寄生性なく、胡麻の Marcosporium 菌は篦麻及び胡蘿蔔に寄生せざるものであつた。

分類學的考案　胡麻に寄生する Macrosporium 屬の菌としては從來記載せられたものがないが、Kvashnina 氏 (2) は露國に於て胡麻の葉に圓形又は不整形の褐色病斑を生ずる Alternaria sp. なるものを記載して居る。卽ち氏の記載に依れば該菌は擔子梗帶橄欖褐色で、1乃至4個の隔膜を有し大さ 26－48×4.4－5.2 μ あり、分生胞子は短頸を有するフラスコ狀のものより長頸（胞子自體の長さの5乃至6倍）を有する棍棒狀のものまで種々あり、帶橄欖褐色で1乃至14個の横隔膜と1乃至4個の縱隔膜あり28－362（長頸を含む）×5.3－24 μ ありと言ふ。Macrosporium 屬に就ては分類上異論がないではないが (1) Alternaria, Thyrospora 及び Macrosporium の三屬を認むるものとすれば (4) 恐らく Kvashnina氏の菌は Macrosporium 屬に入る可きもので、著者の菌と同一のものではないかと考へられる。尙 *Macrosporium Ricini* 及び *M. Carotae* は胡麻の Macrosporium 菌と形態上類似する點があるが、寄生性に於ても培養的性質に於ても異り著者の菌とは異るものである。以上の事實より胡麻の Macrosporium 菌を新種と考定し之を左の如く命名する。

Macrosporium Sesami Kawamura, n. sp.

Conidiophores arising singly or in fascicules, simple, erect and more or less flexu-

ose, yellowish brown, 1–5 celled, 51–90×4–6μ, each dearing single conidium at the tip. Conidia are fusiformel or obclavated, 30–111 × 9–33μ, with 3–13 transversal and a few longitudinal septa, terminating in a long hyaline beaks, 30–210×2–3μ, somewhat constrict d at the septa, yellowish brown, dark olivaceous when mature.

Hab. On the leaves of *Sesamum indicum* L. in Fukuoka, Japan.

2. Alternaria に因る斑點病

病　徴　胡麻の葉に初め直徑0.5粍位の微小なる暗褐色圓形斑點を生じ、普通は徑2乃至3粍位の圓形斑點をなして居る。斑點の周邊さ健全部との境は明瞭で、この點前記の Macrosporiumに因る病徴さは明かに異る。葉の表面の病斑の周邊は暗褐色で稍隆起しその内部は之より淡い褐色で時に輪紋狀の隆起線がある。葉の裏面の病斑は表面のものに比し輪紋狀隆起線あることさ少く、病斑部は稍隆起して居る。多くの場合一葉に數十個の多數の病斑を生じて居る。



3

病原菌　擔子梗は葉の表裏共に單獨又は數本叢狀をなして生じ僅に屈曲して居る。普通分岐しないが稀に分岐してゐる。黃褐色で基部稍太く先端は丸味あり且僅に膨大して居ることがあり、分生胞子の落ちたものでは胞子痕が認められる。1乃至7個の細胞よりなり大さ30–90×3–5μである。分生胞子は擔子梗上に1個單獨に生ずるか又は2個連鎖狀に生じ、倒棍棒狀を呈する。分生胞子は黃褐色で頸部は短く稍淡色でその先端は丸く時に稍膨大して居る。小數の縱隔膜さ2乃至10個の横隔膜を有し隔膜部僅に縊れて居る。分生胞子の大さは26–80×7–14μで頸部の幅は2–3である。胡麻の葉の病斑上に生ぜる本菌の分生胞子の單個培養を行ひ之を培養及び接種用に供したが、本菌は乾杏寒天上に初め淡橄欖色の菌叢を生じ次第に濃橄欖色さなり、氣中菌糸少く速に多數の分生胞子を生じて表面 褐絨狀さなる。かくて生ぜる分生胞子は多數連鎖狀をなして生じ時に其數12個の多きに達する。之等分生胞子は寄主體上のものに比し大さ稍小さく頸部は短きか又は之を缺き濃橄欖色を呈する。

寄生性　上記の如くして得たる本菌ノ純粹培養を以て胡麻の葉に Macrosporium菌の場合と同様の接種を行つたのであるが、有傷接種せるものでは2日にして接種部黑變し次第に病斑擴大したが直徑5粍位の褐色小斑點に止りこれ以上擴大せず、即ち自然に



於ける病斑の特徴を示した。無傷接種のものは發病迄尚數日を要し對照のものは全く發病を認む可き變化がなかつた。前述せし處により明かなる如く、本菌の形態は Elliott 氏 (1) の所謂 *Alternaria tenuis* 群に屬するもので本群の菌には死物寄生菌が多い。故に著者は數回に亘り接種試驗を行ひ本菌が胡麻に對して寄生性あるを確めた。

分類學的考案 胡麻乃至胡麻科植物に寄生する Alternaria 屬の菌にして記載せられたるものは未だない。Kvashnina氏 (2) の Alternaria 菌は前述せし如く *Macrosporium Sesami* に類似し著者がこゝに述ぶる Alternaria 菌とは明かに異る。依て著者は本菌を新種と考定し之に次の如く命名する。

Alternaria sesamicola Kawamura, n. sp.

Conidiophores arising singly or in fascicules, simple or branched, more or less flexuose, yellowish brown, 1—7 celled, 30—90×3—5μ. Conidia are produced singly or in chains at the tips of the conidiophores, obclavated, yellowish brown, 26—80×7—14μ, with 2—10 transverse septa and with a few longitudinal septa.

Hab. On the leaves of *Sesamum indicum* L. in Fukuoka, Japan.

文　　　獻

(1) Elliott, J. A. (1917): American Jour. Bot. vol. 4, p. 439—476.

(2) Kvashnina, E. S. (1928): Bull. North. Caucasian Plant Prot. 4, p. 36—46. (Ref. R. A. M. vol. 7, p. 764.)

(3) 中田覺五郎・瀧元清透(1928):勸業模範場報告15號、69—70頁

(4) 吉井甫(1926): 病蟲害雜誌 第16卷 第12號 1—7頁

插 圖 說 明

1. *Macrosporium Sesami* に因り病斑を生ぜる胡麻の葉 (縮小)

2. *Macrosporium Sesami* の分生胞子と擔子梗(×375) (6／10に縮小)

3. *Alternaria sesamicola* に因り病斑を生ぜる胡麻の葉 (縮小)

4. *Alternaria sesamicola* の分生胞子と擔子梗(×600) (6／10に縮小)

菌類隨筆 二

白井光太郎

日本で菌類に關する單行本を著はした最初の人は松岡恕庵先生で寶暦11年に出版せられて居るが2巻より成る圖說である。其後段々菌譜を著はした人があるが15巻の菌譜を著はした人は坂島蘭畹といふ人で、是が最も大部のものである。文化8年11月に作つた序があつて此人が43歳の時の著述である。予が見たる本は8巻が解說で7巻が圖であり、第1巻は芝譜第2巻は松菌譜第3巻は京畿名品譜第4巻は東奥名品譜第5巻は諸州菌譜雜品譜第6巻は有毒品菌譜第7巻上藥用品譜第7巻下藝文第8巻西土品類が記載してある。此人の著はした隨筆に濟所漫筆といふ書物があるが其の中に食用菌でも過食すれば中毒する恐れある事が注意してあるから參考の爲に抜萃する。

(1) 魚屋文藏と云ふ者は日光山の麓に住居して居た人だが山に行つて簟菌を採り得た。實に美事な物であつたから數百本を食つた所俄に吐瀉を始め目が眩んで歩行けなくなり、酒屋に入り休息し中毒なるを悟り酒屋の主人に藥を乞ふた。そこで酒屋の主人は酒は毒を解すものであるからとて酒を飲ませた所急に胸が惡くなり食物を吐出したのを見ると菌が未だ消化せず微し黄色に變じて居たといふ。其後7ケ月もぶらぶらして始めて平癒したといふ事である。川村季一の話である。

(2) 3人が布引菌を煮食した所1人は血を嘔き腹が下つたが死を免れた。1人は心腹が硬結して治療の効がなく死んだ。1人は無事であつた。血を嘔いた者は少し多く食ひ、死んだ者は多く食ひ、無事の者は少く食つたのである。布引菌といふは人が通例食ふ菌であるが多食すれば害のある物である事此の如くである。

(3) 2人の碁打があつた。或る大名が之を招き碁の勝負を見物して勝つた方の者に褒美として好きな食物を馳走する事とした。1人は玉子を嗜み1人は初菌を嗜んだ。初菌の嗜な者が連戰連勝して御褒美を請求したから大きな初菌100本を與へ50本を羹とし50本を炙つて食つたが尙ほ不足の顏附で有つたから又100本を與へた處其半分を食ひ盡した頃から眩暈を起し煩悶を始め手足をもがきて遂に瞑目したと云ふ。初菌は通例食膳に上すものであるが多食すれば矢張害のある事は此の話でわかる、愼むべきである。

(以上三話原漢文今口語體に譯)

増島氏も少壯の時は菌が好物で食べられる菌は澤山食べたものであるが、ある老人の話や上述の如き實例を見聞してからは濫りに菌を食ふ事を止めて仕舞つたと記して居る，先生の墓は淺草の乘滿寺と云ふに在り墓碑銘は古賀煜といふ人が書いて居る。漢文で讀み惡くいから大意を譯して參考に供する。

先生は諱は固字は孟葦と云ひ俗名は金之丞其號を蘭園と呼んだ。祖父の名は信都父の名は渭水諱信道と云ひ學問道德の高い人で御書物奉行を勤めた。先生は幼時武術を修め二十二歲に成つて學問に勉勵し寛政九年歲二十九で學問所の乙科に及第した。三十一歲大番といふ役になり祿二百俵を賜つた。三十九歲昌平校の役人となり四十二歲儒員見習となり四十六歲儒員に任し月俸十五人扶持を給ふ，先生幕府に慶事ある每に祝詩を献し時服を賜ふ事五回に及び又其著書干役志を献上した爲官板の書を賜ふた事がある。先生は性質慈愛に富み謙遜で人の究厄を救ふを好み人の德行を賞揚するも遽に不淑を拒遠せず其自俊を待つといふ風があつた。親に事ふる事篤く三年の喪に居つたといふ事である。先生の親父も書物を蒐集されたが先生も亦書物を多く購求貯藏せられた　又本草學に精しく繪事にも堪能であつた，又漢文が達者で工文の名あり，著書は四十餘種に及び其中菌史頓史、燕窠志、佛法僧鳥考等は本草に關する者である。明和六年十月十三日生れ天保十年九月四日病死す。享年七十一。

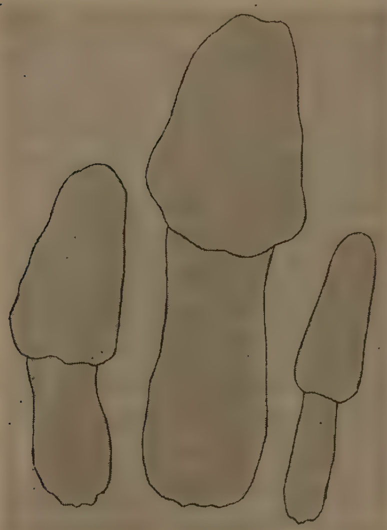


巨大なる蕈の發生

東京府下立川町府立第二中學校5年生數名が此程北多摩郡村山貯水池附近の山林中で高さ1尺8寸蓋の直徑6寸7分といふ素晴しい大きな蕈を採取したとある，此巨大な蕈は我國ではカラサタケと稱し英語でも Parasol mushroom と呼んで居る、又我國では俗にニギリタケ或はニギリンコの名がある、川村博士の記するところによると岡山縣吉田郡田邑村に發生したものは高さ1尺5寸餘あつたと云ふことであるから今回のものは其最大なるものであらう、筆者も岐阜縣惠那郡川上村の竹林中• 靜岡縣田方郡中大見村の雜木林中で採集したが大さは遙に小さかつた。

ニギリタケとは如何なる意味であるか一寸考が及ばないであらう、が、市岡知寛が信陽菌譜に詳細を圖說して居る、卽ニギリタケ俗握蕈　生陰地濕處

初生嫩時類男陽握之則痿縮放之則勃然怒起故名之不知淫婦就而戯之老則長大而[redacted]壯馬陽尋常婦人不所可企及可笑噉之謂不害人亦一奇也、とある圖は「ペニス」に似た菌が3個書いてある。吉田雀巣著の芝栭譜中にニンギリコとしてカラカサタケの蓋の開かないものが圖示してある。坂本浩然著菌譜坤にも握蕈ニギリタケの圖說がある、本挿圖は之である「形狀定まらず、好て陰濕の地に生ず、其色淡紅、若し人手にて是を握ときは則痿セ縮む放つときは則勃起す老するときは莖長大なり、未だ食するものを見ず」。ニギリンコ又はニンギリコと稱するンコはキノコの意味であるか又或物を意味した語か、筆者其意を知らないが美濃、信濃地方では蕈のことをコケと稱するから、ケを去つて縮めたものか又はキンコの方言があるので此から出たのかである。



カラカサタケ　則ちニギリタケの學名を Lepiota procera (Scop.) Quel. と稱する。屬名 Lepiota は Lepis 卽鱗片 ot1 耳と稱する「ギリシヤ」語から來て居る、鱗片の如き耳ある蓋を有する菌と云ふ意味であらう、又種名の procera は高い意味である、莖が極めて長いから此名が出た譯である。

蓋は初め卵形で綿細工の様に柔軟であるが、次第に開きて稍扁平となるが、中央部は常に突出する、白色又は淡褐色であるが其上に褐色の鱗被を有する。併し蓋の頂部は鱗片狀に裂けない被覆を有するから濃褐色である、蓋は莖に離生する、幅が廣くて密に存在する。胞子は白色楕圓形である、擔子嚢に混じて棍棒體を有する。莖は細長く中空で表面は褐色を帶ぶる、上部に鍔を有する、鍔は丈夫にして容易に莖から分離して莖に沿ひて上下に動かし得る、莖の下部は塊狀をなして居る。此菌の蓋や褶は綿細工の如く彈性があり之を握ると痿縮するも之を放すと元の如くなるが信陽菌譜や浩然菌譜にある様に勃起る程のものではない。(原)

露國皇帝アレキシス陛下
は何の爲めに崩御あらせられしか

露國皇帝アレキシス陛下や佛蘭西のベツキー伯の如き王侯も蕈の爲めに一命を失われたと思へば誰かこれを懼れないものはないであらう、此蕈は紅天狗蕈（ベニテングダケ）Amanita muscaria L. と稱するもので本邦は勿論世界に廣く分布するものである、我國ではアシタカベニタケ又はアカヘイトリ（赤蠅取）の方言がある、獨乙語では Fliegen pilz, 英語では Fly-amanita で則ち蠅蕈と呼んで居る、併し我國のハイトリタケは別の菌ヘウタケ（Amanita pantherina D. C. テングタケ、ヘビキノコ）がある、ベニテングタケは其蓋は紅色鮮美で上面には白粉を散布したるが如き白膜の裂片なる疣を稍同心環狀に敷いて居る、肉色は表皮の直下は黃色なるも其他は雪白である、蓋の徑の大なるものは 15 cm. あつて莖は其長さが 20 -25cm. もあつて極めて長い故に足高紅蕈の名がある、蕈の質は纖維質から出來て居るので縱によく裂ける。莖には外皮の裂片綿の如くに附着して粗糙の感がある、又莖の基部に鐔があるし莖の上部に鍔がある。褶は白くて莖から離生する。胞子は白色で球形に近い楕圓形である。

俗に蕈は纖維質で裂けるものは無毒だと稱せられて居るが此菌は纖維質のものである、汁液は惡臭もなければ辛味がない、銀貨を變色せしめないから如何にも無毒蕈の樣に思はれるので間違ひが起るのである、此蕈を炒りて少しく柔軟となし液汁の出るに及んで水少許を入れ置ける皿の中に投じて褶を下に向けて蠅の群つて居る場所に置くと蠅は飛來して其液を舐むるものであるが、かくすると蠅は忽ち麻醉して斃るるものである。此蕈の中に含まるる毒素はシミーデベルヒ及コツペ氏によると「ムスカリン」と稱する「アルカロイド」であると云ふことである、「ムスカリン」は 0.003 – 0.005 gr. で大きな犬や猫を斃すことが出來ると云ふことである、斯く猛毒を有するものであるにもか

かわらずカムチヤツカに近き西比利亞に住むところのコラツクと稱する種族の民は越橘の一種なる黑色の小果實を採り來り之を搾つて汁を作り此蕈の乾きたるものを浸して置く、かくした汁液を飲むと烈しく醉ふ爲めに沍寒を忘るるに至るので屢々之を用ゆると云ふことである梅村甚太郎氏によると現に信州戶隱地方では此蕈のziを豆粒大に丸めて之を食するだけでも三合位の酒を飲用したると同じ樣に酩酊すると稱せられて居る、又同地方では此蕈の壺を去り皮を剝ぎ燒き若しくは煮て食するものがあると云ふことであるが斯かる蕈は食はない方が安全である。（原生）



（Cooke氏より）

蕈體各部の名稱

原　　攝　　祐

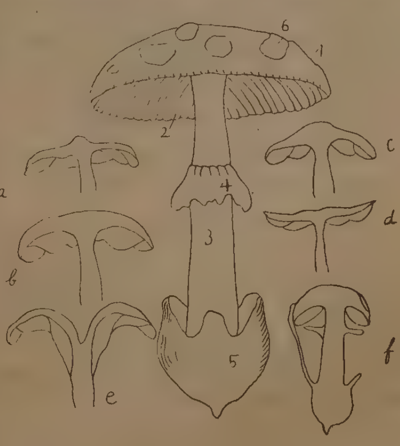
本邦古き蕈類の圖說があり其圖說には極めて判り易き術語が用ひてある、然るにも拘らず、近來菌類を特別扱にして菌傘とか菌柄と云ふ樣に菌の字を冠するものが多くなつたので、白井、川村兩博士は蕈體各部の名稱の統一を圖らんが爲め術語を古きものにより定められて植物學雜誌（26卷309頁大正元年9月）に提出せられた。吾人が常に此術語によつて記述して居るものであると同時に本誌に於ても之れにより一定して行かと思ふから茲に揭げて置く。

1	蓋	（葢）	Pileus	5	壼	（脚苞）	Volva
2	襇	（襴）	Lamella	6	疣	（疣點）	Warts
3	莖		Stipe	7	蓋膜	（襟）	Veil
4	鍔		Annulus				

Volva を脚苞としてあるが近來壼を用ゆる方が大分ある之も簡單でよい。

襇が莖に附着して居る其着き方が種類區別上重用なる位置を占むるものである、即ち

a は襇に直生する adnate
b は襇に彎生する sinnaet
c は襇に隔生する abnexed
d は襇に離生する free
e は襇に垂生する decurrend
f は特に疣點の出來るのを圖示したもの



白井博士によると。
襴の字は吳蕈譜に用ひてあると。

餅　病　の　話

餅とは古來から稱せられた名であつて其形狀が餅に似て居るから斯かる名が出たのであらう。「結毦錄」中卷四丁「怪事」寶永6年冬、京北村落の樹に餅を生ず、取つて炙り食へば常の餅の如し。とある此書何れの樹とも其の種類が記してないのと冬季に發生したと云ふ點から考へると餅病ではないらしい、取つて炙り食へば常の餅の如しとは眉唾物である。見聞雜記　御勘定吉川榮左衞門支配所、上州山田郡の內、龍舞村名主隱居庭に文化2年の5月10日比、左圖(圖略)の如く椿木に人手を生ず、其色白く六七歲位の小兒の手の如く厚さ手程にて爪は鳥の樣子少し有之、蟲の巢か又は朽木に出來候茸のやうにも相見ゑ候よし、同月13日稻垣藤四郎手代、中澤良右衞門儀鄉村巡りの時見及び候由、と之はツバキに餅病の出た場合である。

明治41年頃香川縣にてツバキに餅病の出て喧がれたことがある、其際自分は京都日の出新聞に餅病の正體につき辨明した、其頃澁谷あたりにもツバキにスイミツトウが成つたと云ふて見物人が押しよせた事さへあつた、之はツバキのモチビヤウに罹つたもので決して怪異のものではない。

餅病に關しては又古來一種の迷信がある、夫れは本邦何れでもさうであるか知らないが木曾地方では之が生ずるのを非常に恐れたものである、即ちツバキにモチが成ると其家に不幸があると云ふのである、若し不幸でもあるとあの家のツバキに餅が成つて居たと迄云ふたのである、故に若し其の事を知つたなれば僧侶とか神官を呼んで不幸の來らざる樣神佛に祈つたもので餅の祈禱と稱し、小供の時我々も投餅を拾ひに行つたことがある、今は我等が極力迷信に過ぎないことを宣傳したから斯かる事は行はない、餅祭の寫眞でもあれば珍品である。

モ　チ　の　種　類

日本に餅病の種類は少くない併し其主なるものは

ツバキノモチビヤウ	Exobasidium	Camelliae Shirai.
サザンクハノモチビヤウ	E.	Camelliae var. gracilis Shirai.
シヤクナギノモチビヤウ	E.	hemisphaericum Shirai.
チヤノモチビヤウ	E.	vexans Massee.
ツツジノモチビヤウ	E.	japonicum Shirai.
クスノモチビヤウ	E.	Sawadae Yamada.

等である。

以上のモチビヤウは年々少しづつは何れの處にも發生する、特にツツジでは6月頃葉に極めて多く發生する、チヤノモチビヤウは大正8年以來4－5年間日本各地に發生して茶の産額を非常に減少せしめたことがあるが近來は發生しないが本年は又發生した。ツバキノモチ病は伊豆の大島へ行くと發生が多いさうで同地ではイモチと稱して居るさうである、三好理學博士は中等植物學教科書にツバキの飯餅病と書いて居らるるが飯と餅とを結び付けた名は同書にあるのみで他には使はれて居ない。中等教育の教科書など

に斯かる新名稱で併も植物病理學者さへ知らざる名を御出しになるのは初等教育の爲め面白くないこと、思ふ、斯くないでさへ植物病理學者間では色々の名が出て困るのである、チヤノ餅病の如きも腫萎病・火腫病・葉腫病・Habukure-byo 等の名があつて混雜して居る。

茶の餅病



葉に白色の紋を生じて居るのが餅病斑で裏面の方に膨らんで居る

餅病の原因

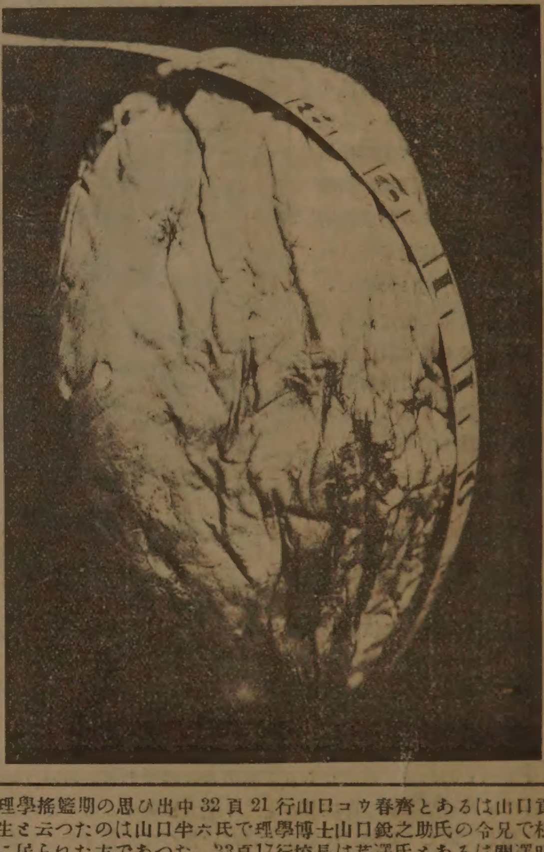
餅病の原因に就てはダニの害であるとか、又は水滴が「レンズ」の作用をなし日光を強度に屈折吸收する爲めの刺戟作用であるとの臆説が行はれた時代が外國にあつた、日本では茸の樣なものであると云ふて本質に觸れて居る、餅病は餅病菌の空氣傳染によるものである、其越年する所は未だ明でない、恐らく芽の鱗片の間等であらうと云ふことである、葉、葉柄、新梢嫩葉等に發生するものである。

ツバキの餅病には形が色々ある、水蜜桃だとか人手とか或は餅が成つた樣である、水蜜桃の如きものは子房が變形したもの、人手の如きものは花芽の變形である、又新芽に出ると蓮華の如きもの又はチヨンマゲの如きものになり、新葉に出ると投餅の樣になるものである、何れも白色又は蒼白色で肉質で内容は充實して居るが粗である、白粉を蒙つた樣である、此の白粉は餅病菌の胞子が形成せられたのであつて棍棒狀の擔子嚢と稱するのものの上に形成せらるる病菌の本體である。菌絲は細胞間隙を蔓延して養分を吸收する其結果菌絲の存在部が著しく肥大膨張するものである。餅病は純粹の活物寄生菌と稱して決して死物には寄生し得ない從つて培養することが出來ないものである、之等の類を草野先生は寄生者(Parasite)必須的(Obligate)全寄生者(Holoparasite)腐生榮養期を有しないものとして御出でになる。(原)

南瓜の蔓に冬瓜が成る

某農學士の話に清水市在には不思議のこさがあるものだ。南瓜の蔓に冬瓜が成つたと云ふて或村の農業者が持つて來て居つた、實に立派な冬瓜であつたさ云ふことである。サテ如何にも面怪な話だ、記者はそんなこさは決して無い何かと誤まつたものであろうさて首實驗にしかずさ早速電話を掛けて持つて來て貰らつた、ところが之は驚くなかれ馬勃さ稱する菌であつた、之は學名を Lasiosphaera Fenzlii Reichardt さ云ひ、和名をヤブダマ・オニフスベ・ミミツブシと稱する。

ヤブダマ (Lasiosphaera Fenzlii Reichardt)



此寫眞は其際直に撮影したものだが少しく萎縮して居る。白色平滑で略球形である一種劇しき菌臭がある。胞子は內部に形成らるゝ、乾燥するさ恰度髑髏の樣であるから竹林や茶園などで人を驚かすことは屢々あるが、南瓜が冬瓜がに變化したと見たのは之が嚆矢であらう、此處で一寸馬勃さ云ふ漢字を借りたが森康一氏によるも支那の馬勃は一種でなくてホコリタチ科の數種と混じし居るさ云ふこさもある。(原)

前號の訂正　植物病理學搖籃期の思ひ出中 32 頁 21 行山口コウ春齊とあるは山口貢進生の誤記で、山口貢進生さ云つたのは山口半六氏で理學博士山口鋭之助氏の令兄で松江藩の貢進生さして東京に居られた方であつた。33頁17行校長は芹澤氏さあるは關澤明清氏の誤なる由白井先生から御注意があつたから訂正する。又佐々木先生の御話中の琉球の某氏さは松下之基氏である由同先生の御回答を得ましたので併せて報告申上ます(原)

菌類學會規定

1. 本會を日本菌類學會と稱する。
2. 本會は菌類に趣味あるものの連絡を圖り以て斯學の發達を期するを目的とする。
3. 本會は其目的を達する爲次の事業を行ふ。
   1. 毎年四回雜誌菌類を發行する。
   2. 時宜により臨時の出版物を發行する他隨時隨所に會同を催し同好者の親睦を圖ること。
4. 本會は會員組織であつて本會の趣旨に贊成するものを以て組織する會員の會費は1ヶ年2圓50錢とする。
5. 本會に入會せんと欲せらるる者は會費1ヶ年分以上を添へて申込まれたい。

靜岡市北安東町二丁目二七四
日本菌類學會

會費は適宜「原攝祐」振替口座東京64427番へ振込を乞ふ。

定價壹冊	60錢
郵稅	4錢
1ヶ年分	2.50錢

昭和6年11月1日印刷
昭和6年11月3日發行
毎年四回

編輯兼發行者 原攝祐
靜岡市北安東2丁目274

印刷者 庵原忠一郎
靜岡市土太夫町10

發行所 日本菌類學會
靜岡市北安東2丁目274

發賣所 養賢堂
東京市麴町區元園町1ノ7
振替 東京25700番